

# 虹に そろばん もっと世界に



北米チャンピオンになったウィンストンさんと記念撮影する坂林さん(右)

## ① アメリカで伝える珠算の精神

そろばんの起源は、紀元前2000~3000年頃のメソポタミア地方にさかのぼる。中国から日本に伝わったのは室町時代だ。日本独自の改良が加えられ、上段に一つの玉、下段に四つの玉という現在の形で定着した。それが太平洋を渡った。

アメリカ・オレゴン州ポートランドには、世界的なIT企業やスポーツウェアの本社や研究開発拠点が集まる。坂林美和子さん(59)は、その郊外の街でそろばん教室を四半世紀にわたり主宰している。

中国やインド系の食料品店や雑貨店が並ぶエリアの雑居ビルに教室を構える。文字も書けない園児も、大学進学を控えた高校生も生徒だ。「日本なら『座れ』と言ったらすぐに座る。こっちの子は我が強いからそうはいかない」と笑う。背景が多様だから、生徒によって伝わり方が違う。同じことを教えるにせよ、10通りの説明を用意する。

最初は自宅で2人の生徒を教えるところから始まった。日本人駐在員の子どもと、日系人だった。今ではもっと多様なルーツを持つ120人が教室に通う。



高岡市で鍼灸院を営む視覚障害の両親の下に生まれた。父は工場での事故で片目を失明した。その後、もう片方も光を失った。母も弱視だった。忙しく、目が不自由な両親の代わりに家事を担ってくれたのは祖母だった。

父は腕利きの鍼灸師で、母が施術を手伝った。プロのスポーツ選手や、大企業の役員もはるばるやって来る。しかし、どれだけ仕事ができても、視覚障害者への視線は今より一層冷たかった。道すがら両親をさげすむような言葉を耳にした。わずかな光が見える母に、父が寄り添って歩いていると「昼間から何しとるんや」と罵声を浴びた。坂林さん自身も学校では、映画「座頭市」の目が見えぬ主人公のモノマネをされた。悔しかった。でも、胸の内に留めた。「両親が身をもって感じていることを子どもから聞かされる必要なんてないじゃない」

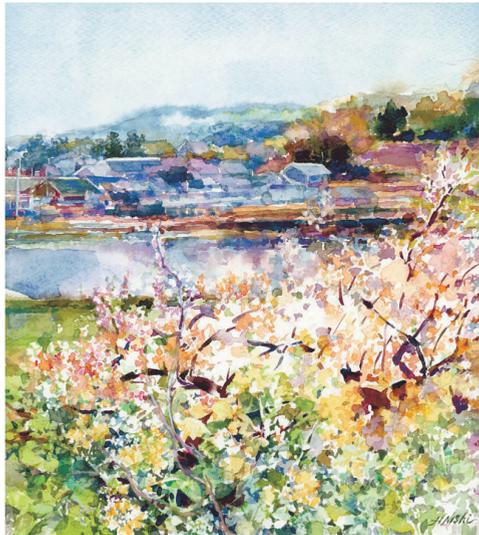
父も母も家族のために休みなく働いた。駅近くに大きな家を建ててくれた。みんなに頼られている腕前が誇りしかった。反発することもあったが、困難に立ち向かう背中、坂林さんにとって人生の指針だった。

珠算に出会ったのは、小学2年生だった。「そろばんができれば、仕事に困らない」

と言われる時代だった。しかし、坂林さんにとってそろばんへの愛着はそんな打算的なものではなかった。上達するのも、競争するのも、ただただ楽しい。暗算もすぐにできた。頭の中でそろばんの玉が動くイメージが鮮やかに浮かんだ。それに若くて朗らかな先生が好きだった。両親には言えない学校でのつらい出来事も聞いてくれた。4年生の離れた姉のような存在だった。

4年生で初めて臨んだ県大会。会場までの車に酔ったのか、嘔吐してしまった。それでも3位に入った。大好きな先生から「心臓に毛が生えている」と褒められた。もっとそろばんが好きになった。その後は県大会で優勝を重ねた。

6年生になると、敬愛する先生が結婚で県外に引っ越すことになった。そろばんは先生がいたからこそ好きになった。「もういいかな」と思った。よその教室から誘いもあったが、利用されるようで嫌だった。



「花桃の里」西治亨

そろばんをやめた後の生活は軸を失ったようだった。中学も高校も張りがなかった。専門学校卒業後、地元の銀行に就職した。再び、そろばんが活躍した。電卓を使うより、仕事が速い。職場でも重宝された。しかし、昇進の機会は大卒の男性行員に偏っていた。同僚の男性が栄転する姿に触れ、銀行での将来が色あせて見えた。



1992年、27歳で退職した。両親にも相談せず、渡米を決めた。外国への憧れはずっとあった。オレゴン州の語学学校に入ることにした。当時、富山県とオレゴン州は友好提携を結んだばかり。あてがあったわけではないが、現地で暮らせば仕事に結び付くと思い込んだ。無計画な見切り発車だった。

名古屋空港から飛行機に乗った。窓側の席で雲を眺めて、「どうか着きませんように」とつぶやいた。日本を離れた瞬間に不安になってしまった。スーツケースにはお守りのようにそろばんをしのばせていた。

10代の若者に交じって必死に勉強した。リスニングが苦手で、映画「ホーム・アローン」と「ターミネーター」シリーズのビデオテープを擦り切れるほど見た。「アルビバック」が「I'll be back(私は戻ってくる)」だと気付くには、時間がかかった。

友人の紹介で知り合った現地の男性と結婚した。日本で暮らした経験があり、飲食事業を手掛けている人物だった。3人の子どもをもうけた。結婚後5年間は異国の地での子育てに明け暮れた。

ある日、夫がニューヨーク・タイムズの記事を見せてくれた。ニューヨークのそろばん教室を紹介していた。「君もやるべきだ」と勧められた。乗り気にはなれなかつ

た。英語に不安があったし、能力をひけらかすようにも思えたからだ。しかし、夫は「あなたが誰かに教えることで、それが輪になって広がっていく」と背中を押してくれた。

そろばんは得意でも、指導は未経験だ。日本以外でそろばん教室を開く人や、応用数学の教授を訪ねたりして、教え方を学んだ。少しずつワクワクした。新聞に小さな広告を出し、自宅で教室を始めた。教室は地元紙の取材をきっかけに広まった。アジア系を中心に生徒は数カ月で10人、20人と増えた。

2005年に離婚した。夫の事業がうまくいかず、夫婦関係にも影を落とした。自宅も売却した。3人の子どもを抱えてのシングルマザー生活が始まった。生活を支えてくれたのは、やはりそろばんだった。家庭で

は浮き沈みの日々が続いたが、教え子たちの伸びゆく姿に救われた。



教えるのは、単なる計算スキルではない。「人間形成の核となる価値観。忍耐力ですよ。立ち向かう姿勢です。長い計算では1カ所でも間違えると全てが台無し。そろばんは挑戦する精神を育てるの」と言う。自身もそろばんに鍛えられたから断言できる。

教室では、学校での活動の様子や悩みにも耳を傾ける。水泳大会の成績を尋ねたり、音楽発表会の様子を聞いたりする。幼い頃、敬愛した先生にそうしてもらったように。

だから生徒も厳しい指導に耐えてくれる。4歳から坂林さんに学ぶウィンストン・チャンさん(17)は昨年、全米1位、世界9位の成績を取めた。坂林さんの両親が視覚障害者だったことに触発され、高齢者施設や盲学校でそろばんを教えるボランティア活動も始めた。「先生は僕ら一人一人を理解し、サポートする。多くの卒業生が今も先生と連絡を取り続けています。きっと僕もそうするでしょう」と坂林さんを慕う。

教室の運営はずっと上り調子だったわけではない。共同経営者に資金を使い込まれた。その影響で破産宣告に追い込まれた。うつ病と診断され、カウンセラーに毎週通いながら自分を保った。そして教室を建て直した。「鉄人みたいに言われるけど、耐えきれなくなる時もある。でも自分に与えられた人生はこれ一つ。この人生を生きるの」

毎年3月、教室の生徒が全員参加する大会を開く。壇上であいさつする瞬間に浮かぶのは亡くなった両親の顔だ。「働きづめだったから私が小学生の時には応援になんて来られなかった。今なら来てくれるかな」。アメリカで困難を乗り越えられたのは、理不尽に屈せず生きた両親の姿が胸にあったからだ。

インドやドバイでも指導したり、大会を開いたりしないかという誘いが届く。「いざとなったら、アメリカでくすぶっていることもなさそうね」と冗談めかす。そろばんを弾く小さな音は、世界でたくましく響く。

坂林さんは3月1日、北米珠算連盟の理事長に就任します。就任後の最初の大仕事は8月にロサンゼルスで開催を予定している国際大会の準備です。世界から参加者が集まる一大イベントです。世界でその野を広げることが目標です。成績を追うだけでなく、人生を通じて意味を持つ珠算教育を広めたいという思いがあるそうです。



「虹」第9集 販売中  
「虹」を書籍化しています。最新刊の第9集『虹 海の匂いを覚えて』は2022年9月から24年5月までに掲載した20編を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時~午後5時)。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50  
北日本新聞社西部本社「虹」係  
FAX 0766-25-7773  
mail niji@kitanippon.jp  
次回掲載は4月1日(火)です。

紙面提供/人と鉄のあいだに  
OTANI 大谷製鉄株式会社  
企画・制作/北日本新聞社  
メディアビジネス局